

# 白川静のことば

## 《11》



金子都美絵・画

『莊子』の巻頭、逍遙遊第一のはじめに、次のような文章があります。北冥（溟）に魚有り、其の名を鯢と為す。鯢の大きいなること、其の幾千里なるかを知らず。化して鳥と為る。其の名を鵬と為す。鵬の背、其の幾千里なるかを知らざるなり。怒んで飛ぶ。其の翼、垂天の雲の若し。是の鳥や、海運るときは、則ち將に南冥（溟）に徙らんとす。南冥とは天池なり。

この描写は、颱風とその方向を逆にしていますが、まさに颱風現象そのものを描写したと思われる文章です。

～中略～

颱風がもし鵬のような鳥であるならば、それは海中にあるときは魚であつたに違いない。鯨などよりもまだ大きな、「其の幾千里なるかを知らず」という、まさに颱風圏に相当する大きさです。これはどうみても、颱風現象としかみえないものですが、莊周はこれを、悟境に達した哲人の無辺大の活動力にたとえようとしたのでありましょう。

それにしても、今年、わが国には颱風の多い年でありました。その惨害は各地に及び、十数万の人がその猛威の前に苦しんでいます。地球の上に、何らかの変動が起こりつつあるのではないかというような無気味な予感もあって、自然に対して人間はもっと謙虚でなくてはならぬのではないかということ、切に感じます。

『桂東雑記』III（二〇〇五年より）

『文字答問』平凡社ライブラリー P127～129)

